

専攻医
の主張

専攻医1年目にして初心を忘る

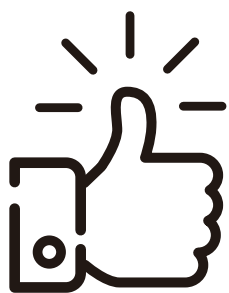
市立三次中央病院 糖尿病・代謝内分泌内科 宮地 康平

ようやく寒かった冬も終わり、桜が咲き始めた今日この頃。このたびの冬は近年まれにみる寒波が襲い、県北育ちの看護師の方々によると、数十年ぶりの大雪であったとのことだ。長かったCOVID-19も、ようやく収束の兆しが見え始めている。私が研修医として働き始めたのは2020年4月からであり、ちょうどCOVID-19が流行し始めた時期だ。卒業旅行にイタリアへ行ったのだが、自分が訪問した地域が2~3日後にパンデミックにより順次閉鎖されていくといったように、ぎりぎりの状況で旅程を終えた記憶がある。就職後も病院での飲み会もなく、マスクを着けているのが当たり前の状況であり、同病院の職員や外来の担当患者でも素顔を知らない人が一定数存在する。

私はここ三次中央病院で初期研修2年を終え、そのまま糖尿病・代謝内分泌内科として継続勤務させていただいている。医療的な手技はほぼない一見地味な科ではあるが、糖尿病という疾患の性質上、多くの患者さんと長く関われる点、二次予防ではなく一次予防として健康寿命に寄与できる点に魅力を感じこの診療科を選択した。専攻医となっても環境は変わらず、職員や院内のシステムに慣れている分スムーズに仕事ができるかと考えていたが、初めての外来、一人での救急対応、検診業務、発熱外来など業務内容や責任が増え、思いの外大変で、新年度から忙殺される日々を送った。ようやく仕事に慣れてきたかと思えば、気付けば1年という月日が過ぎようとしていた。正直なところ、その場しの

ぎで仕事をこなすようになっていたのも否めない。しかし、この冬自分の初心を呼び起こされる症例に当たった。その方はもともと糖尿病治療調整目的で入院された患者であった。既にASOに対し数年前にバイパス術後であったが、下肢の動脈硬化は高度であり、入院時に認められていた下肢潰瘍が日に日に悪化し、家族同席のもと血行再建や下肢切断の意思確認を行い、循環器内科・皮膚科・整形外科へ相談しつつ方針決定を進めていくうちに、創部からの敗血症により亡くなられてしまった。予想以上の早い^{てんまつ}事の顛末を見届けてようやく、自分がこの診療科を選んだ理由を再認識させられたのであった。

さて、近年注目を集めている薬剤としてSGLT2阻害薬がある。当初は糖尿病の治療薬として世に出た薬剤だが、ここ数年で心不全や腎不全の予防効果のエビデンスが集積し、他科から処方されていることも珍しくはない。HbA1cの改善効果以上に上記の付随効果が認められることから、血糖コントロールが良好な症例でも処方を切り替えるべきであるとの話も出ている。HbA1cのような表面的な事象に囚われず、患者の将来を見据え、より患者にとって有益な治療を行う。医師としては当たり前のことではあるのだが、まだまだ経験の浅く視野の狭い私では、ふと気を抜くと分かりやすい結果に満足してしまいそうになる。「無知の知」ではないが、自分の未熟さを^{しんし}真摯に受け止めつつ、地域医療に貢献できる医師になるために日々精進していきたいと感じたのであった。



Facebook更新中!

もみじ医が広島県医師会のイベント情報をお知らせしています。
フォローして最新情報をチェックしましょう。

